

# 樹木の心材形成に就て 第1報

クロマツ樹幹内に於ける心材部  
並に辺材部の存在状況について

九州大学農学部 千葉宗男

## 要 括

1. 心材の生因を究明する一助として福岡市近郊に於て25年生より778年生迄、合計約650本のクロマツについて樹幹各部に於ける心材部並に辺材部の年輪数及びその巾を髓心を中心とする四方向について調査測定した。

2. 当地方に於てはクロマツは大体20年生前後から心材を形成し始める。

3. 心材部の年輪数は樹令の増加につれて増加し、140年生前後で心材部年輪数が辺材部年輪数と略、同数となる。

幼令時は一年輪中心材化するに数年を要するが、60~80年生では二年間に一年輪心材化し、130年以上の高令になって始めて一年に一年輪又はそれ以上が心材化する。

4. 同令の樹木では直径の大きなもの程、即ち生育の旺盛なもの程心材部年輪数多く、心材部巾も大きい。

5. 同令の樹木について立地の良否と心材形成との関係を見ると、優等地のものが劣等地のものより心材部年輪数、心材部巾に大である。

6. 心材部巾の直径に対する比率は直径程の大なる程小さく、又優等地のものが劣等地のものよりも小となる傾向がある。

7. 地上高別各断面とも樹幹の方位による心材部の年輪数及び巾の差は見られなかった。

8. 心材部年輪数、巾共に幹基部から樹梢に向つて漸減するが減少の仕方は一枚ではなく、個樹により、又生育の良否、老幼等によって異なる。

9. 心材部並に辺材部の面積及び全断面積に対する比率も一般に樹梢部に向つて漸減する。

## 〔附 記〕

本報告の詳細については九州大学農学部演習林報告第18号を参照されたい。